

学生主体で行う実習のオリエンテーションの教育効果の研究

山口 求* 和田恵美子** 松井幸子** 松本七十子*** 武内龍伸**

A study on the educational effects of student-centered training orientation

Motomu Yamaguchi * Emiko Wada** Sachiko Mastui ** Nasoko Matsumoto*** Tastunobu Takeuchi **

*奈良学園大学 保健医療学部（〒631-8523 奈良県奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1）

**Department of Health Science, NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomiigaoka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)

***元藍野大学 医療保健学部（〒567-0012 大阪府茨木市東太田4-5-1）

** Department of Health Science, Faculty of Nursing, AINO University. (4-5-1, Hgachiooda, Ibaraki-shi, Osaka, 567-0012, JAPAN)

*** 藍野大学 医療保健学部（〒567-0012 大阪府茨木市東太田4-5-1）

*** Department of Health Science, Faculty of Nursing, AINO University. (4-5-1, Hgachiooda, Ibaraki-shi, Osaka, 567-0012, JAPAN)

要旨

目的: 学生の「学びの発表」を学生主体の実習オリエンテーションとして導入した。2011年度の実習終了後に自由記述調査結果、【実習指導者とのかかわり】【事前学習知識を整理する段階】【効果的な実習の実践力の向上】

【実習で学ぶ生命の尊さ】【家族とのかかわり】【実習の教育効果】の6つのカテゴリーが得られた。そこで、本研究は質的調査結果の6つのカテゴリーが実習における教育効果として妥当かを検討するために、2012年度の質問紙調査結果から、学生主体の実習オリエンテーションは教育効果があるかを検討することを目的とした。

方法: 2011年度の実習終了後に、「学生の発表」によるオリエンテーションの結果からの学びを自由記述式で調査を行った。結果、類似性、関係性から分類して6つのカテゴリーが抽出された。そのカテゴリーと内容から質問紙を作成し、2012年度の実習終了後に質問紙調査を行った。因子分析を行い、因子名と因子項目を信頼性の α 係数から、6因子とその因子項目の整合性から検討した。

結果: 因子分析の結果、6因子が抽出され、 α 係数.96~.76と高い整合性が得られた。第1因子から順に【実習指導者とのかかわり】【事前学習知識を整理する段階】【効果的な実習の実践力の向上】【実習で学ぶ生命の尊さ】【家族とのかかわり】【実習の教育効果】と命名できた。

考察: 抽出された6因子は、2011年度の質的分析のカテゴリー名とほぼ一致するものであり、学内での「学びの発表」は、学生主体で行うオリエンテーションとなり、発表を聴く学生にとって有効な実習準備学習ができ、実習に対するイメージ化ができ、不安から実習意欲につながり、効果的に実習を行うことにつながっている。学生主体で行うオリエンテーションは、学生自ら何を学ぶか理解し実習に生かし、積極的な実習の質の向上につながっている。そして学生自らが自己を振り返り自己成長するという変化にまで至っている。自分で学習を深めるアセスメント能力、自己を変容させるという人間性を養う力をも獲得するという教育効果があると考える。

キーワード： 小児看護学実習 オリエンテーション 学びの発表 自己成長 教育効果

1. はじめに

近年の学生の特性で、臨地実習(以下実習)におけるコミュニケーション能力の低下や人間関係を築くことが困難な世代になっているため、実習に対する不安や精神的ストレス

を訴える学生も少なくない。

学生が実習での体験を通して、自己を成長させていくことができる(加藤、渕野、永嶋ら¹⁾, 2001)いう報告しているように、教員や指導者の意図的なかかわりにより学生の肯定感情を高めるか否かを左右するともいえる。金子(2005)

²⁾ も学生の実習での感動体験は、学生の不安や戸惑いを軽減させ、実習意欲や主体的な行動変容に繋がることが示唆している。また、大滝、大木、加藤ら(2014)³⁾は、臨地実習で学生自身が自ら学びとる力を育成するために重要な場として位置づけているように、実習において看護教育を充実させることは、学生の自己成長に関わる最も重要な課題であり、教育効果が期待できることから実習に対する教育的な配慮が必要である。これまでの先行研究には、本研究の教育効果について検討するものは見当たらない。

そこで、学生が実習で体験したことを語る「学びの発表」を学内で行い、実習における学生主体のオリエンテーションとして導入した。2011年度の実習終了後に学生に実習での学びを記載する記述調査を行った。結果、【準備学習の知識を整理する段階】【準備学習への消極的な参加姿勢】【効果的な実習の実践力の向上】【実習で学ぶ生命の尊さ】【実習指導者とのかかわり】【実習での人間関係の構築】の6つのカテゴリーが抽出された。「学びの発表」は、学生の感動体験を学生に語ることで共有することができ、実習のイメージ化が可能となり学生の不安の軽減につながっている。意欲的に実習に取り組み、効果的な実習になり、教育効果につながることを示唆した(山口、大川、和田ら、2012)⁴⁾。

本研究は、2011年度に導入した学生の体験を語る「学びの発表」を継続し、実習終了後学生に自記式調査を行った結果、【実習指導者とのかかわり】【効果的な実習の実践力の向上】【準備学習の知識を整理する段階】【実習で学ぶ生命の尊さ】【家族とのかかわり】【実習の教育効果】の6つのカテゴリーが抽出された。細項目を質問内容として質問紙を作成し、2012年度の実習終了後学生に質問紙調査を行った結果、因子分析で6因子が抽出され、項目間の α 係数.96~.76と高い整合性が得られた。2年間に渡り行った調査結果では同様のカテゴリーが得られており、その内容は実習到達度を示唆する内容となっており、学内での「学びの発表」は学生主体のオリエンテーションとして実習における教育効果があると考えている。

2. 研究目的

学生主体のオリエンテーションとして、「学びの発表」を学内で発表する方法を導入し、自記式調査結果、6つのカテゴリーが抽出された。細項目から質問紙調査を行い因子分析の結果、6因子が得られた。カテゴリーと因子名はほぼ一致することから、オリエンテーションとして「学びの発表」は、実習における教育効果があるかを検討することを目的とする。

3. 方法

3.1 研究対象 2012年度 A大学3年生に在学する看護学生で、8月末~3月初めまで実習を行った学生103名を対象とした。

3.2 データ収集期間 2013年2月21日~3月8日に実施。

3.3 12年度に実習を行った3年生の実習終了した最終日に、調査の目的と調査内容の説明と、回答方法は、質問に該当するところに○印をしてもらうように説明した。一斉にアンケートを配布し、教室の収集ボックスに入れてもらう方法とした。103名のうち97名(90%)から回答が得られた。

3.4 質問内容の構成

2011年度履修学生の自由記述内容から分類された【準備学習の知識を整理する段階】【準備学習への消極的な参加姿勢】【効果的な実習の実践力の向上】【実習で学ぶ生命の尊さ】【実習指導者とのかかわり】【実習での人間関係の構築】の6つのカテゴリーは、実習の到達目標であり、実習における教育効果を反映した内容である(図1)。6つのカテゴリーの細項目から65項目を作成した。質問内容(記述内容)の整合性を得るために、因子分析を用いた。回答には、「思う」5~「思わない」1とし、5段階尺度を採択した。実習終了後に調査を実施した。

3.5 データ分析方法

因子分析主因解、プロマックス回転し、因子負荷量が0.4以上を採択した。因子項目の整合性には、信頼性の分析であるCronbach α 係数を用いた。統計ソフトSPSS23.0Jを使用した。

4. 倫理的配慮

対象者への研究依頼は、研究目的と方法を口頭と書面により説明し協力を得た。人権保護については、研究参加の自由、匿名性、情報を守秘することを説明し、研究に不参加の場合、また途中で参加を中止しても不利益を被らない。対象者へは成績と関係のないことを説明し、協力を得た。また、研究結果を学会等の発表に用いることの同意を得た。A大学倫理審査委員会の承認(承認番号:aino21)を得て実施した。

【教育効果とは】

看護学教育のカリキュラムでは、臨地実習の目的を、看護実践活動が展開される中で、これまで学んだ看護学の知識・技術・態度及び倫理についての理論と実際を統合して対象を理解し、看護を実践する基礎的な能力を養うことである(杉森、舟島、2018)⁵⁾。この目的から実習の目標となる到達目標をクリアすること、あるいはその目標が実践を通して理解することにある。到達度の判定は実習評価内容(実習評価項目)となる。

5. 結果

2011年度の自記式質問紙で得られた6つのカテゴリーとその内容から、質問紙を作成して2012年度に調査した内容を因子分析した結果、6因子が抽出された(表1)。累積寄与率は54%であり、 α 係数は0.96~0.76と項目間の高い整合性が得られた。7項目が削除された。第1因子【実習指導者

とのかかわり】第2因子【効果的な実習の実践力の向上】
第3因子【準備学習の知識を整理する段階】第4因子【実

習で学ぶ生命の尊さ】第5因子【家族とのかかわり】第6因子【実習の教育効果】が抽出された。【準備学習への消極

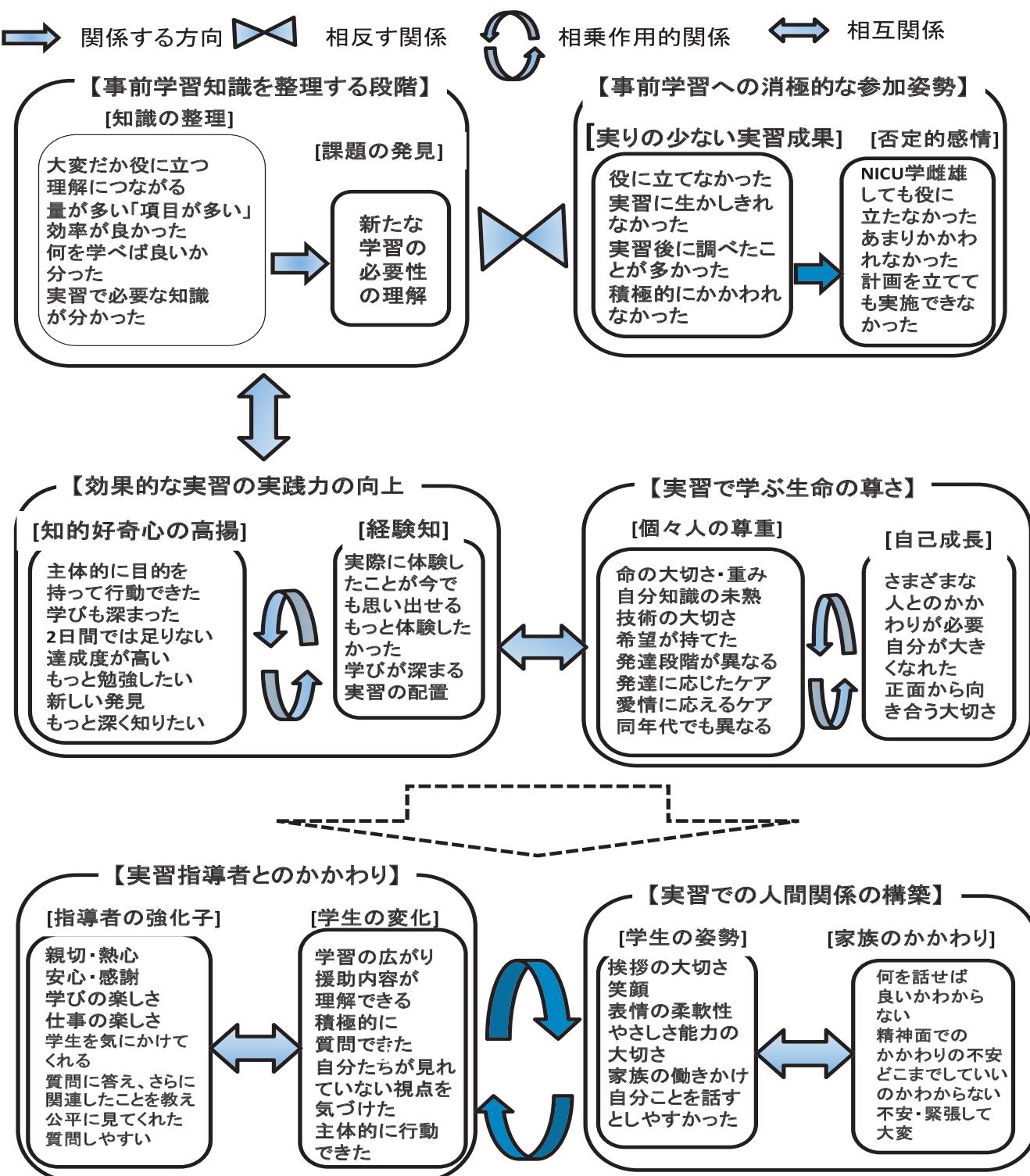


図1 学生:主体で行う実習のオリエンテーションの教育的效果の評価⁴⁾

表1 学生主体の実習オリエンテーション因子分析結果

n=97

	因子項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
実習指導者とのかかわり	Q25 指導者は親切に指導してもらえた	.88	.03	.01	.05	-.04	.06
	Q26 指導者は熱心に指導してもらえた	.87	.03	.04	.04	-.03	.07
	Q27 指導者は親切で安心できた	.85	-.05	.14	.10	.01	-.03
	Q35 指導者は質問しやすかった	.85	-.06	.06	.22	.07	.02
	Q29 指導者は学生に気を掛け、変化に気づける	.84	.10	-.03	.06	.05	-.02
	Q34 指導者は学生を公平に見た	.82	.03	.07	.08	-.05	-.18
	Q28 指導者に感謝する	.81	.19	.08	.02	-.13	.12
	Q33 指導者は質問に対して関連内容も教えてくれた	.80	.15	.01	.06	-.11	.04
	Q32 指導者は質問に丁寧に答えてくれた	.75	.19	-.07	.16	-.10	-.02
	Q59 指導者に看護実践させてもらい感動した	.56	.06	.34	.10	.04	-.02
	Q58 指導者の看護を体験したいと思った	.51	.20	.40	.14	-.06	-.06
	Q36 学習の広がりが見られた	.47	.14	.19	.41	-.01	.11
	Q37 援助内容が理解できた	.47	.35	.18	.36	-.03	.21
事前学習知識を整理する段階	Q61 技術は命を左右するほど重要なことが分かった	.01	.66	.23	.07	-.02	.00
	Q41 挨拶・笑顔の大切さが看護になると分かった	-.01	.66	.00	.04	-.02	-.07
	Q43 看護師はやしさと能力が大切なことが分かった	.07	.63	.26	.10	.19	-.10
	Q42 看護師の表情・柔軟性の大切さが分かった	.13	.62	.18	.21	.18	-.12
	Q52 自分を振り返ることができ、自己成長に気づいた	.12	.57	.40	-.09	-.13	.01
	Q55 看護師は洞察力が必要なことが分かった	.12	.54	.33	.20	-.03	.02
	Q60 看護は判断力が必要なことが分かった	.02	.54	.16	.32	-.01	.06
	Q50 学生間のコミュニケーションがとれるようになった	.16	.53	.16	-.08	.10	.08
	Q54 看護師の観察はすごいと思った	.15	.50	.27	.24	.00	.05
	Q20 発達によるケアが必要なことが分かった	.03	.48	.03	.12	-.08	.01
	Q17 技術の大切なことが分かった	.07	.47	.07	.17	.08	.05
	Q22 さまざまな人との関わりが必要なことが分かった	.07	.46	.15	.07	.00	.02
	Q21 愛情にこだわるケアが必要なことが分かった	.11	.44	.07	.12	.04	-.12
	Q19 発達段階が異なることを知った	.02	.42	.10	-.04	-.09	.04
	Q16 知識の未熟さが理解できた	-.05	.42	.01	.09	-.04	.12
効果的な実習の向上	Q62 事前学習でイメージでき不安が軽減できる	.04	.16	.76	.05	.22	-.01
	Q65 発表を体験することで発表力がついた	.01	.04	.73	.31	-.07	.06
	Q64 実習は自分を変化させ高められると学んだ	.03	.12	.65	.31	-.12	.13
	Q23 自分が大きくなれたことに気づいた	-.10	.07	.64	.02	.02	.11
	Q56 事前学習が効果的だと実習意欲となる	.05	.32	.60	.10	.20	-.24
	Q53 自分の変化に気づいた	.15	.31	.60	-.16	-.10	.19
	Q40 主体的に行動をとることができた	.27	.34	.57	-.05	.07	.09
	Q38 積極的に質問することができた	.30	-.01	.54	.19	-.06	.23
	Q57 実習への関心が高まることに気づけた	.21	.47	.53	.10	.07	-.02
	Q4 量が多いが効率よくできることが分かった	-.04	.29	.49	.40	-.04	.09
	Q44 家族への働きかけは自分のことを話すと話しやすい	.29	.35	.48	-.21	-.05	.03
	Q63 他の学生の発表は役に立った	-.03	.27	.46	.33	.02	.06
	Q2 何を学べばよいかわかった	.15	.27	.45	.36	-.08	-.14
	Q3 実習で必要な知識の理解ができた	.05	.31	.44	.43	-.01	-.05
	Q30 学びの楽しさを知った	.35	.16	.41	.37	.01	.13
実習の専門性と生命	Q11 深く知りたいと思った	.20	.14	.08	.80	-.09	.03
	Q10 勉強したい意欲につながった	.22	.22	.10	.74	.03	.13
	Q1 大変だが役に立った	.10	.29	.31	.55	-.01	-.21
	Q15 命の大切さ・重みが理解できた	.11	.34	.05	.43	-.14	-.05
	Q8 学びの深まりに気づけた	.10	.02	.32	.43	-.05	.12
	Q5 新たな学習の必要性が理解できた	.16	.32	.15	.42	.12	.09
	Q12 体験が思い出せるほど感動した	.33	.34	.07	.42	-.09	-.16
家族との関係	Q45 家族と何を話せばよいか分からなかった	-.04	.04	-.05	-.02	.88	-.03
	Q46 家族の精神面の関わりは不安であった	-.02	-.12	.00	.09	.78	.10
	Q47 家族とどこまで話せばよいか不安があった	-.07	-.02	-.08	.02	.75	-.11
	Q49 家族への関わりが大変と思った	-.08	.16	.16	-.29	.67	.07
	Q48 家族への関わりは緊張した	-.06	.25	.10	-.23	.52	.39
人間構築	Q42 看護師の表情・柔軟性の大切なことが分かった	.09	-.07	.26	.33	.11	.79
	Q41 挨拶・笑顔の大切なことが分かった	.09	-.07	.26	.33	.11	.79
	Q43 看護師はやしさの能力が大切と分かった	-.01	.17	-.13	-.21	-.04	.65
	Q50 学び間のコミュニケーションがとれるようになった	.14	.40	.30	.09	-.03	.43
寄与率		17.36	7.28	10.91	7.54	7.48	4.07
累積寄与率		17.36	24.63	35.54	43.08	50.51	54.58
Cronbach's α係数		.936	.889	.869	.864	.799	.767

的な参加姿勢】は、除外項目や他因子に分散され、【家族とのかかわり】が抽出された。2011年度のカテゴリーとほぼ一致していた。

2012年度の質問紙調査の結果を因子分析による因子名と因子項目の検討をした（表1）。

第1因子には、実習指導者の指導内容で「親切に指導」「熱心に指導」「質問しやすかった」「安心できた」「学生を気にかけてくれる」「学生に公平みてくれた」など13項目からなり【実習指導者とのかかわり】と命名できた。 α 係数は0.93で高い整合性が得られた。細項目の内容から指導者の指導は、学生の実習を積極的にする要因となっており、指導者のかかわりは学生の実習を左右するほど重要であることが分かった。

第2因子は、「学生を気にかけてくれている」「自分の変化に気づいてくれる」「事前学習のイメージ化で不安が軽減した」「主体的に行動できる」「自分が大きくなつたと気づける」「発表力がついた」「自分を変化させ高められる」「実習への関心が高まる」「自分を振り返られる」「事前学習が効果的だと実習が意欲となる」であった。そして「主体的に質問ができる」「主体的な行動がとれる」などの事前学習により実習意欲や行動を変化させる因子項目から【効果的な実習の向上】とした。 α 係数0.88と高い整合性を示した。実習意欲や行動の変化から自分の変化に気づけていた。

第3因子には、「もっと学びたい」「もっと勉強したい」「大変だか役に立つ」「学びの深まり学習の広がり」「新たな学習の必要性」「実習で必要な知識の理解」などの実習のための学習の理解とアセスメントに必要な学習の必要性などにつながる13項目からなり、【事前学習知識を整理する段階】と命名した。 α 係数0.86と高いものであった。この結果からも分かるように、学生自身が学習能力を高める内容となっていた。第2因子と第3因子の項目内容は、実習目標の到達度にかかる内容であり、教育目標から効果的な実習ができることを示していた。

第4因子は、「発達によるケアが必要」「発達段階が異なる」「さまざまな人とのかかわりが必要」「技術は命を左右するほど重要」「愛情に応えるケアが必要」「看護は判断力が必要」「看護師は洞察力が必要」「看護師の観察はすごい」などの項目からなり、小児看護で学んでほしい内容であり、【実習で学ぶ生命の尊さ】とした。 α 係数0.86であった。実習体験でなければ学べない看護師の実践力は、対象の生命を左右するという看護の重要性が学べていた。机上の学習では、獲得できない教育効果となっていた。

第5因子は、5項目と少ないが家族でまとめられ「家族と何を話せば良いか不明」「家族の精神面のかかわりは不安」「家族とどこまで話してよいか不安」「家族へのかかわりは大変」「家族とのかかわりは緊張」と家族とのかかわりの難しさを表す項目から、【家族とのかかわり】と命名でき

た。 α 係数0.77であった。

第6因子は、「看護師の表情・柔軟性の大切さ」「挨拶・笑顔の大切さ」「看護師は優しさの能力が大切」「学生間のコミュニケーションがとれる」の4項目で、第1因子の看護師とのかかわりから看護を学んだ内容であり、【実習の教育効果】とした。 α 係数0.76であった。

6因子の α 係数は高く信頼性のある因子名であった。因子項目内容からも、「学習意欲を高める」「自己の変化に気づく」など、実習への学びの高さを示すものであった。

6. 考察

小児看護学実習は、子どもとのかかわりが少なく、子どもに対して苦手意識やコミュニケーションが難しいと感じている学生が多い。このことは、実習の不安要因を高めることにもつながり、実習意欲の低下を招き、消極的な実習になるという悪循環となる可能性が高いと考える。

看護は実学と言われるように、学生が自ら感動するような体験をすることができるれば、学生は自信と看護に対する肯定的感情につながり、自己変容させることができ、将来の看護観をも左右することになる。学生の実習が悪循環なものとならないよう工夫するのは、教員の役割であるが、実習体験は看護教育の効果につながるものであり、学生が積極的、かつ意欲的に実習に取り組み感動体験ができる実習が学生を変容させることにつながると考える。加藤、渕野、永嶋ら(2001)¹⁾も学生の実習における体験の重要性を示唆している。

そこで、本研究で取り組んだ学生主体のオリエンテーションとは、学生が実習で体験したことを、学内において「学びの発表」をするので、聴く学生にとっても追体験や共感することができる。学生の体験した新鮮な学びの内容が具体的に学生に伝えられたことは、これから実習に臨む学生にとって、実習で何をするのか分からず漠然とした不安が、事前に学習する内容がわかり学習を深める段階で、既に不安は軽減することにつながる。さらに、実習のイメージ化ができることで、実習に対する意欲へと変化して実習に臨むことができると金子が(2005)²⁾報告しているように、本研究における「学生の学びの発表」の結果で得られた内容の効果を示唆するものである。

佐藤・津田・山下ら(2008)⁶⁾は、看護学生の実習到達度の評価と今後の課題の研究で、「学生が経験した現象の表現を意味づけていくことの重要性と、教員が学生の経験を共有し、その意味を探求する上で鍵となっている」ことを述べている。本研究では、学生の発表での「気づき」に教員が共感した評価や称賛をすることで、学生の自信につながり、聴いている学生の実習意欲を高めている。学生の体験を語ることの重要性を示唆するものである。香川、櫻井(2007)⁷⁾も、「看護学生は体験から学ぶことにより、学ぶ楽しさを知

り、少しでもできたという体験を重ねていくことができれば、主体的な学習に取り組むことができる」と述べている。つまり、学生が語る「学びの発表」は、看護学生は体験から学び、学生の実習到達度をクリアして学ぶことができている。学生の満足感や看護に対する考え方が変容することにつながることから、学生の実習による体験は実習の看護教育を効果的にするものと判断できる。

教育効果と指導者のかかわりとの関係においては、「熱心に指導してくれる」「丁寧で安心できる」実習における教育効果とは、「親切に指導」してくれ「質問しやすい」「質問に関連した内容も教えてくれる」と言った指導者への尊敬や看護者としてのあこがれもあり、実習をするうえで学生にとって、指導者の存在が大きく、指導内容もストレートに学びにつながっていることから実習を左右させる要因になることが分かる。このことは実習指導者と学生の良好な人間関係が構築できている結果であり、指導者とのかかわりが教育効果に反映するということになると考える。指導者は学生にとって、手本となり看護の基本を自ら学び、効果的な実習により「自分を振り返られた」「自己成長に気づいた」などの自己教育力につながっている。

教育に共通する目的には、「豊かな人間性を養う」ことが挙げられている。そのために必要な学生の能力は「自己を振り返られる能力」や「問題解決能力」などがあり、実習において【実習指導者とのかかわり】は、学生の学習する意欲の向上は問題解決能力に不可欠な要素であり、アセスメント能力となる。また学生自身が「自己成長に気づける」という学びは、豊かな人間性の育成につながっている。したがって、主体的に実習取り組むための学生が実習体験を「学びの発表」から得られる内容は、これから実習に臨む学生にとって、準備学習に始まり実習内容を効果的なものにすることにつながっており、教育効果があることを示唆するものである。

実習指導者の学生を「尊重した熱心な指導が、学生の主体的な学習意欲や行動」に変化をもたらしている。学生に意識させようとかかわりをすることによって学生の自己教育力が育まれていくことを、山田、堀井、近藤ら(2010)⁸も指摘しているように、指導者のかかわりが学生を変容させることにつながり、学生が実習内容を到達するうえで重要な存在であり、かつ実習における教育効果を左右することにつながると考える。

学生の実習到達度を左右するのは、指導者との関わりが実習における教育効果につながることを、本研究により明らかになったと考え、特に指導者の学生への尊重した関わりは、実習は意欲的になり行動変化につながることを示唆できる。指導者の「親切してくれた」「熱心に教えてくれた」「学生を気にかけてくれて安心した」というかかわりが、学生の効果的な実習への取り組みに繋がっている。そのことで実習に「主体的に取り組み」意欲的なものにし、「自分

を振り返える」「自分の変化に気づける」「自分が大きくなつた」と自己変容に気づけており、実習だけにとどまらない看護学教育の目的もある「専門職業人としての態度を養う」ことにもなり、教育効果があることは明らかであると判断する。

次の第2因子【効果的な実習の向上】において、「主体的行動」「自分が大きくなつた」「自分を変化させ高められる」「実習への関心が高まる」「自分を振り返られる」などの学生の発表内容項目であり、指導者とのかかわりの効果が、実習の質を向上させることにつながっており、実習到達度の「学生を変化」させることにつながっている。また、その背景には、事前学習が効果的であれば実習意欲につながり、指導者に「主体的な質問」ができ、事前学習の必要性を学生から強調することは、教員によるオリエンテーションと指導者との関係性の構築にもつながっている。

このことを野田、大島、大野ら(2019)¹¹らの看護学実習の評価の在り方の研究結果を考察すると、教員・看護師と学生の関係には、学生の満足度が高いことを示す正の相関を示しており、学生が実習指導者との関係、またスタッフへも相互に影響を与え、学生の実習の満足度となり、実習の教育効果につながると考える。

第3因子の【事前学習知識を整理する段階】においても、学習することで「学びが深まる」、「自主的な行動ができる」などの積極的な行動へと変わり、学生自身が「自分の変化に気づける」と人間的な成長とも言える高いレベルの学びができている。実習を効果的にするためにには、事前学習で何を準備しておくかが効果的な実習につながることを示したものであり、学生の体験した「学びの発表」のオリエンテーションから、学生が何を準備して臨めばよいかを示し、実習に役立てられ、自らを変化させるという「自己成長」という教育効果につながることを示唆するものである。事前学習をして実習に臨み、質問や主体的な行動が、実習指導者への指導の熱心さにつながっていると考える。

藤本、山川、中島ら(2011)⁹が最近の学生は、人間関係が希薄で、かつコミュニケーションが苦手意識の学生が増える傾向にある学生にとって臨地実習は、学生のストレス行動や対処行動に対する自己効力感を左右し、学生の実習への心理的適応に影響すると指摘している。また、黒田・合田・小藪ら(2010)¹⁰によると、実習の学生にとって臨地実習は多大な知識と対象者との関係、未知な経験に対する不安やストレスを抱えて臨まなければならず、学生の自己成長に繋がらないことをも報告している。実習におけるこのような問題は、日常的に聽かれ実習の困難性を示唆している。

本研究における「学びの発表」の結果から学生が効果的に事前学習することで、実習への不安やストレスの軽減にもつながり「学習意欲」や「主体的な実習への取り組み」ができるようになっている。実習の行動変化や自己を成長させるなどの実習効果を示す内容から、学生の体験を語る

「学びの発表」によるオリエンテーションは教育効果を示唆できる。

事前学習の効果は、実習により「教えられていることの理解」や「知識を活用することの意味の理解」を効果的にしていることは明らかである。したがって、「もっと深く知りたい」「学びの楽しさ」「広がり・深まり」「実習で必要な知識」など実習の看護の展開に不可欠なアセスメント能力につながり、実習を効果的にする内容である。このことは、実習に臨む学生の不安の軽減や実習意欲に繋がり、学生自ら学習意欲を高め、「自分を振り返られる」「自分が成長したこと気にづける」という自分の変化を意識化できる能力を獲得することであり、自己教育力そのものである。この教育の効果は、実習の体験無くしてえられるものではなく、教員が学内の演習などで意図的にかかわっても獲得できるものではないと考える。

学生が体験して学べる実習の重要性を示唆するものである。看護師の看護の姿勢が学生への態度に影響することは明らかである。このことについて榎本・田邊・中西ら(2013)¹¹は、臨床と協働しながら教員が学生を指導することの必要性を指摘している。蒔田、大島、大野ら(2019)¹²らの評価の在り方研究で示唆していることと、同様であり、本研究においても学生が実習で最も影響を受ける存在であり、実習の教育効果を左右することになる。

【家族とのかかわり】では、家族に対して「何を話せばいいのかわからない」「どこまで話せば良いか不安」「かかわりが大変」「かかわりは緊張する」と言った因子構造から、学生は親からの視線は「評価」と感じて、かかわりに戸惑いをもつ傾向があることが窺える(小代、檜木野, 2012)¹³。

しかし、学生は「自分のことを話すと話しやすい」ことに気づけており、家族にも積極的にかかわることを学生自らの体験により、学生の積極的に実習に臨み、実習が効果的になることを共有していることができる。小児看護の難しさは、家族との信頼関係に左右されると言つても過言ではなく、看護師にとっても苦手な看護でもある。

学生の「心配ですね」と共感する学生の行動は、母親にとって、自分の子どもに注意を払い、懸命になってくれる存在として、学生を受け入れてくれる家族もあり、重要な情報を看護師に提供できるなど、看護師よりも言いやすい存在として受け止められている場合もある。母親の不安げな一言を質問として聞くと、看護師は「そんなことを気にしていたの」と、看護師が学生の気づきを褒めて、母親への不安への対応をするという。学生と看護師の相互作用的な関係がさらに、家族との関係に発展していると考える。

事前学習を準備することをスタートとして、指導者とのかかわりにより意欲的に実習に臨み、実習の楽しさを体験することができ、効果的な実習の向上へつながり、主体的に実習できる行動へと変化することができている。このことは、実習目標をクリアすることを意味しており、学生

の感動体験とも言える発表を聴く学生にとっては、学生が実習に挑む力となる。学生の生の声である「学びの発表」内容は、積極的な実習ができ実習の体験により自らを変化させるという「自己成長」を認識できるほどの教育効果につながることを示唆するものである。

7. 結論

学生主体の実習のオリエンテーションでは、【実習指導者とのかかわり】【事前学習知識を整理する段階】【効果的な実習の向上】【実習で学ぶ生命の尊さ】【家族とのかかわり】【実習の教育効果】の6因子は、 α 係数も高く項目間の整合性から因子名とその項目の妥当性がある。6因子と因子項目は、実習到達度と実習評価を示すものであり、実習における教育効果を判定する指標になると考える。

学生の体験した「学びの発表」のオリエンテーションは、【事前学習知識を整理する段階】では、学生が何を準備して臨めばよいかを示しており、事前学習は知識として実習に生かされて積極的な実習へと変わっている。さらに、学ぶことの意味は自らを変化させる実習の体験の強みとして実感を獲得するに至っており、教員が学内で意図的に設定して学べるものではなく、実習による教育効果である。

実習到達度の鍵となる【実習指導者とのかかわり】は、学生の学習意欲を高め、主体的に、かつ意図的に実習をすることにより、「自分が大きくなった」「自分を変化させ高められる」「実習への関心が高まる」という実習体験が自らを教育することにつながることを体験してできている。学生が主体的に自己の「学びを発表」する方法は聴いている学生の実習のイメージ化につながり、不安の軽減だけでなく、実習意欲を高め実習到達度をクリアすることになり、実習における教育効果があることを示唆するものである。

<利益相反について>

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

(2019.12.20- 投稿, 2020.3.6- 受理)

引 用 文 献

- 1) 加藤法子, 深野由夏, 永嶋由理子, 基礎看護実習Ⅰにおける教育効果の検討: 実習前後の学習意欲の変化から, 福岡県立大学看護学研究紀要, 5(2), 52-60, 2008.
- 2) 金子美香子. 臨地実習指導者の指導に対する意識-やりがた関心度、自信度、負担度の関係. 日本看護学論文集 看護教育, 36, 227-229, 2005.
- 3) 大滝周, 大木友美, 加藤祥子. 看護学生の手術室見学実習を効果的に実施するための教育的試み<第2報>—手術室

実習資料「手術室入室から退室まで」の活用の効果について.

昭和大学保健医療学雑誌, 12, 28-35, 2014.

- 4) 杉森みどり, 舟島なおみ, 看護教育学第6版, 医学書院,
東京, pp, 91-120, 2018
- 5) 山口求, 大川眞紀子, 和田恵美子. 学生主体で行う実習のオ
リエンテーションの教育的効果の評価. 藍野学院紀要, 26,
63-70, 2012.
- 6) 佐藤香代, 津田智子, 山下清香他, 看護学生の実習到達度
の評価と今後の課題—第1回合同実習調整会議における調
査から—, 静岡大学看護学研究紀要, 6(1), 40-47, 2008.
- 7) 香川秀太, 櫻井利恵. 学内から臨地実習へのプロセスにお
ける看護学生の学習の変化:状況論における「移動」概念の視
点から. 日本看護研究学会雑誌, 30(5), 39-51, 2007.
- 8) 藤本裕二, 山川裕子, 中島富有子他. 看護学生が臨地実習
において教員および看護師に求める資質と能力. 保健学研
究, 23(1), 9-16, 2011.
- 9) 黒田裕子, 合田友美, 小藪智子他. 教員による臨地実習指導
に対する看護学生の受け止め方. 川崎短期大学紀要, 30,
23-27, 2010.
- 10) 山田由佳里, 吉田美幸. 看護職の学生指導意欲の構造と学
生指導意欲に影響を及ぼす要因との関連. 日本看護学論文
集 看護教育, 34, 174-176, 2003.
- 11) 蒔田寛子, 大島弓子, 大野裕美他. 妥当性のある看護学実
習評価の在り方—ループリック評価導入に向けた取り組みか
らの考察—, Bulletin of Toyohashi Sozo University, 23,
75-85, 2019.
- 12) 桧木朋子, 田邊美津子, 中西啓子. 臨地実習中の看護学生
への支援内容の検討—実習中の学習と指導の調査から—.
川崎医療短期大学紀要, 33, 9-15, 2013.
- 13) 小代仁美, 榎木野裕美. 小児看護学実習初期における看
護学生と子どもとの関係に影響する要因—小児看護学実習
指導教員の視点—. 日本小児看護学会誌, 21(3), 14-21,
2012.

The educational effects of student-initiated clinical training orientation

Motomu Yamaguchi * Emiko Wada Sachiko Mastui ** Nasoko Matsumoto*** Tastunobu Takeuchi ****

*Department of Health Science, NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomigaoka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)

** Department of Health Science, Faculty of Nursing , AINO University. (4-5-1, Hgachiooda, Ibaraki-shi, Osaka, 567-0012, JAPAN)

*** Department of Health Science, Faculty of Nursing , AINO University. (4-5-1, Hgachiooda, Ibaraki-shi, Osaka, 567-0012, JAPAN)

Abstract

Objectives: A “presentation on the topic of learning,” carried out by students, was introduced as a student-centered practical orientation activity. After the completion of the practical training in 2011, the following categories were obtained in a free-response survey: 1. interaction with practical training instructors, 2. phase of organizing pre-learning knowledge, 3. improvement of skills for effective practical training, 4. learning the value of life through practical training, 5. involvement of family members, and 6. educational effects of practical training. Later, this study examined the educational effects of the student-centered practical orientation using the questionnaire research results from 2012. The aim was examining if the six categories obtained in 2011 through qualitative research were valid tools for evaluating the educational effects on the practical training.

Methods: After completing the 2011 practical training, the learning process of students was assessed using a free-response method based on the orientation results obtained in the “students’ orientation presentation.” As a result, six categories were extracted by classifying them based on similarities and relationships. A questionnaire was then prepared from these categories and their contents, and a questionnaire survey was conducted after the completion of the practical training in 2012. Factor analysis was performed, and the consistency between the six factors and factor items was examined through Cronbach’s alpha coefficient of reliability.

Results: Six factors were extracted after performing the factor analysis and a high consistency was obtained in Cronbach’s alpha coefficients, which ranged between 0.76 and 0.96. The six factors are mentioned as follows: 1. relationship with practical training instructors, 2. phase of organizing pre-learning knowledge], 3. improvement of skills for effective practical training, 4. learning the value of life through practical training, 5. involvement of family members, and 6. educational effects of practical training.

Discussion: The six factors extracted were very similar to the category names obtained in the qualitative analysis conducted in 2011. The “presentation on the topic of learning” conducted on the campus has become an orientation activity led by students. It has allowed students who attend this event to envision and effectively prepare for the practical training, resulting in changing anxiety into motivation, and ultimately leading to effective practical training. The student-centered orientation has helped students understand what they will be learning and use this comprehension in their training, resulting in improvements in the quality of active practical training. This has led to a transformation in which students self-reflect, and experience personal development. Based on these results, the practical training is assumed to have the educational effect of developing the ability of self-assessment in students, which in turn, deepens the capacity to learn on their own and cultivate the attributes that allow them to change and adapt to the learning environment.

Key Word : Pediatric nursing practice, orientation, presentation of learning, self-development, educational effects